

説教 『この身に現れるキリストの力』山本 護 牧師  
聖書 創世記 12：1～4／使徒言行録 3：1～8

エルサレム神殿には、壮麗に造作された青銅の「美しい門」があった(使徒 3:2)。昔も今も、神聖な場所の周縁には物乞いや行き倒れが多い。ここに「生まれながらに足の不自由な男」が、親族か近所の人に運ばれてポイと置かれていた(3:2)。壮麗さと惨めさとの奇妙なコントラストが思い浮かぶ。

男は通りがかったペトロとヨハネを“見”(3:3)、彼らも男を“見て”「わたしたちを“見なさい”(3:4)」と言った。すると男は「何かもらえると思って二人を“見つめた”(3:5)」。この四つの「見る」、原典ではすべて異なる動詞が使われている。意図あつての表記だろうが、「見る」を使い分けている理由は何なのか。徹底して「見る／見られる」ことで、両者の距離は一気に縮まったのではないだろうか。

男の胸には晴れない虚無があった。だが言葉のやりとり以前に、お互いの「まなざし」によって虚無が崩される予感がある。期待したのは金か物(3:5)。それが幼い頃から物乞いして来た男の希望だ。それが救いであり、信仰であった。ペトロは男の期待を察して「カネはないよ(3:6)」とあっさり拒否する。男は気落ちするが、いつものことだ。ペトロは「カネはないけど持っているものをあげるよ(3:6)」と言い、男は物品を期待した。ところがくれたものは、「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい(3:6)」という奇妙な言葉であった。男は、期待した分だけがっかりした。

「わたしには金や銀はない(3:6)」と言うペトロ。財がないだけにとどまらず、自分には助ける能力も協力者もない、といった意味あいではないか。ただ自分が受けている恵みは確かで、それを「あげよう(3:6)」と言った。「立ち上がり、歩きなさい(3:6)」とはペトロの言葉だが、それはまさしくイエス御自身によるものに他ならない。そしてペトロは男の「右手を取って彼を立ち上がらせた(3:7)」。

「あれ、なんだかおかしいぞ」、男は自らの異変に気づく。「すると、たちまち、その男はくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出した(3:7-8)」。自らの足で歩くなど毫も思わなかった。それが自分に起こっている驚愕。男が知っている最大の「救い」は多めの施しだったが、その枠は一挙に砕かれた。男は、虚無の心と動かなかった足に現れた「キリストの力」を、溢れるままに任せて歩き回った。男は「歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と共に境内に入って行った(3:8)」。男も弟子になったのか、自らの足で家に帰ったか。いずれにせよ、恵みが溢れる身体で神を讃えた。

「主はアブラムに言われた。〔あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい〕(創世 12:1)」。アブラム一族の故郷はメソポタミアの古都ウル(11:31)。一族は滅亡したこの都市を離れて大河沿いにハランまで来たが(11:31)、ここから先は道なき荒野。主は淡々と「示す地へ行け」と命じ、「アブラムは、主の言葉に従って旅立った(12:4)」。水も食料も通商路もない、危険な旅であった。

男が想定したいつもの「救い」は、「イエス・キリストの名(使徒 3:6)」によって打ち砕かれ、驚くべき救いが彼自身に現れた。考えてみれば聖書の民も、遠い父祖時代から人間の想定を砕く「主の言葉」によって己が世界を拓けて来た。「主の言葉／イエスの名」それ自体が、キリストの力なのである。



#### 《おまけのひとこと》

皮膚に覆われた身体が私の外壁 心は身体の内外に拡張された世界像 世界は私に限定されている  
キリストはここを打ち砕く 未知が私に流入し 私は未知へ流出する 恩寵はダイナミズムなのか